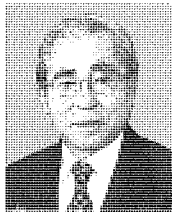


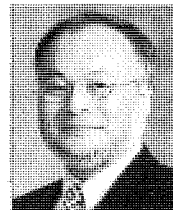
大いに語る 「新世紀のロータリー」

パネリスト



板橋 敏雄

生年月日 / 1931年1月17日
 学 歴 / 1953年 一橋大学商学部卒業
 職 歴 / 1994年 (株)板通 会長就任
 公 職 / 1993年以降 足利商工会議所 会頭
 1994年以降 栃木県産業教育審議会 会長
 ロータリー歴 / 1973~1974年 足利東ロータリークラブ 会長
 1987~1988年 第255地区(栃木・茨城)ガバナー
 1996~1997年 RIゾーントレーニングリーダー
 1999~2000年 RIAアジア問題委員会委員長
 2001~2003年 国際ロータリー理事



関場 慶博

生年月日 / 1950年1月20日
 学 歴 / 1976年 福島県立医科大学卒業
 職 歴 / 1983年 青森県藤崎町にて
 せきばクリニックを開業
 公 職 / 1994~1999年 世界鉄道連盟事務局長
 ロータリー歴 / 2000~2001年 第2830地区ガバナー
 2001~2002年 クラブの発展と改善
 タスクフォース・コーディネーター
 国際協議会SAA



高橋 福八

生年月日 / 1935年1月2日
 学 歴 / 1953年 深谷商業高等学校卒業
 職 歴 / 高橋商事株式会社 代表取締役社長
 埼玉グランドホテル株式会社 代表取締役社長
 公 職 / 本庄商工会議所 会頭
 社団法人本庄法人会 会長
 社団法人埼玉県法人会連合会 副会長
 ロータリー歴 / 1988~1989年 本庄ロータリークラブ会長
 1999~2000年 第2570地区分区分代理
 2000~2001年 第2570地区ガバナー

自己紹介とロータリー所感

▼高橋

皆さんこんにちは。実行委員会から今日の人選を頼まれて、私としては現時点で最良と考えられる人たちを選ばせていただきました。

要するに、ロータリーが大好きで、国際人で、会員の皆さんにやる気と希望を売り込むセールスマンたり得る人という条件で選びました。私はコーディネーターの立場からお二人のご意見を引き出したいと思

います。まず自己紹介からお願いいたします。

▼板橋

私は2550地区の足利東ロータリークラブに所属し、2001年~2003年度国際ロータリーの理事を拝命しています。まずロータリーの魅力について話すようにと高橋さんから言われておりますので、そのことからお話いたします。

実は私のクラブが41年前にできたとき、親父が身

代わりに私を入会させたのです。当時は仕事にかまけて不熱心な会員でしたが、入会3年目に新潟の地区大会に出かけたところ、白髪の上品な方が若造の私の手を取るようして親切に会場に引き入れてくださいました。それが新潟銀行の頭取だったことを知って、身の引き締まる思いでロータリーの素晴らしさを、初めて実感したわけです。毎日をタテ社会の中に生きている私が、夢のようなヨコ社会があることに、完全に魅せられてしまいました。

それから入会5年目に、クラブ幹事としてインターアクトを作ったのがきっかけで、地区の青少年交換・R財団・GSEなどの委員を約20年間務めました。その間に多くの先輩から、貴重なことを細かく、親切に教えられるものが大変にありました。そしてR財団のコーディネーターやトレーニング・リーダーもいたしましたが、とうとうロータリーの理事会に引っ張り出されてしまったわけでありました。

▼高橋

皆さんご存じのとおりRI理事は現時点では日本に1人しかいません。私がアナハイムへ研修に行ったとき、板橋さんはSAAをなさっていました。SAAというのは大変重要な役目だそうでした。板橋さんの次にその役目についた人が関場さんでした。関場さんもこれまた非常な国際人であります。

▼関場

津軽海峡冬景色という歌が流行って以来、津軽は一年中雪が舞っているというイメージを持たれた嫌いがありますが、今は春爛漫で桜が満開の弘前からやってまいりました。

私がロータリーに入ったきっかけは、私が38歳のときに父が亡くなり、菩提寺の住職から勧められたのです。父が亡くなり傷ついていた私が、ロータリーで友達を作ればきっと癒されるだろうと考えてくれたのです。でも私は劣等ロータリアンでして、入ってはみたものの面白くありません。ある日10万円出せと言われて出したらそれがポール・ハリス・フェローでしたが、何の説明もなかったのです。つまらないのでだんだん例会にも出なくなりました。

そんな私が変わったのは、弘前公園の清掃奉仕に参加してからです。朝5時に起きて30人ほどのロータリアンと1時間半ほど公園のごみを拾っていました。散歩しているお年寄りのご夫婦が「おはようございます。ご苦労さんです。ありがとう」と感謝の言葉を次々にかけてくださいます。私としてはむしろ自分の健康のために出かけたのですけれども、結果的にはこんなに感謝されてこれはどういうことかな、ロータリーにはもっと深い意味があるのかなと考えさせられ、また例会に出始めました。

そのうち青少年交換プログラムとの出会いがあり、素晴らしい企画の中で子供たち、親御さんたち、そして国際的な友情が培われていって非常に満たされるものがあったわけです。さらにガバナーになってアナハイムに行きましたら、私の知っていることはロータリーの万分の一に過ぎなかったことに気付かされました。やっとロータリーの本質に気付きつつあるというのが現在の私であります。

ロータリーの第二モットー

▼高橋

板橋さんはRI理事でありながら、足利商工会議所の現会頭でもいらっしゃいます。大変お忙しい中でRIで積極的に発言されているわけですが、RIとは何なのか分かりやすくお話しただけですか。

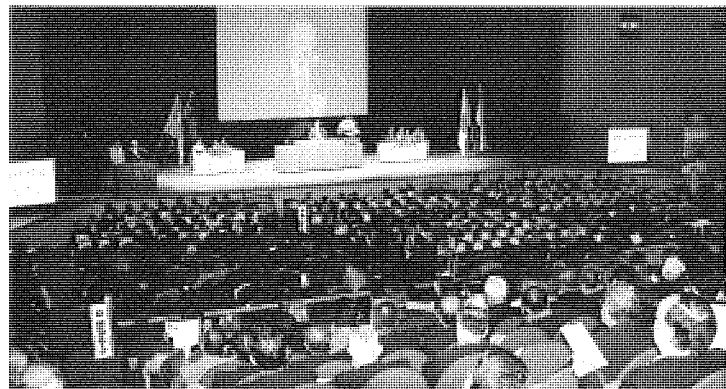
▼板橋

はい。私は昨年7月から理事になりました。任期は2年です。世界の34のゾーンから17名の理事が推薦されてきて、これが国際大会で選挙を受けエレクトになり、翌年の国際大会で指名を受けます。この17名とRI会長、それに会長エレクトを加えた19名で理事会を構成します。この理事会にいろいろ提案するための委員会が五つあり、それと別にジョイ



ントコミュニティーというものもあります。

理事会の役割は、現在162の国に3万149のロータリークラブがありますけれども、それらの管理運営の方針を決めていくことです。とにかく宗教も肌色も言葉も文化も、全く異なる162カ国のクラブを一つにまとめるのですから、容易ではありません。理事会の運営は議題を上げて討議していくのですが、極めて民主的な討議が行なわれております。世界の多様性の中で公平を期して運営されています。私は幸いにして理事の中の10名は知り合いですから、大変ラッキーだと思っています。去年11月の理事会でロータリーの第二モットー「最もよく奉仕する者は最も多く報われる」の復活を提案したときも、これは日本



全国のPGや現ガバナーからの熱い希望を両肩にしょって私が提案いたしました。全員賛成により復活が決まりました。これも友達がいたことが結果的にはよかったのであろう、というふうに思っております。

▼高橋

私がガバナーのときは、ロータリーのPRのためにテレビや新聞にはできるだけ連絡して、広報として活用しましたが、板橋さんは私が新聞で2面使って広告したものを理事会に持っていかれたとか。反応はいかがでしたか。

▼板橋

評判はよかったです。というのも、理事会ではロータリーのイメージがまだ一般の人に定着していないという共通の認識がありまして、それを変えていこうとしています。どうもロータリアンには陰徳の考えが強く、良い事をして隠しておこうとします。アメリカでは公共放送でNPOの宣伝は安くできるのですが、日本ではそうはいきません。ただケーブルテレビ

ジョンを使ったPRは、ロータリアンのネットワークを使えば安くできるのではないかと思います。我々のしていることが良い事であれば、積極的に社会に報知していくことも大切だと考えています。

ポリオ・プラスとの出会い

▼高橋

関場さんはニューヨークからも講演の依頼が来るほどの国際人ですし、またポリオ関係ではオーソリテ

ィーでいらっしやいます。その辺のお話を伺えますか。

▼関場

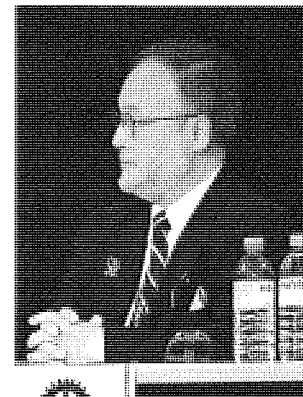
私は1978～80年にガーナへ医療協力で行ってまいりました。女房と当

時10ヵ月の長女をつれて行きました。国際協力事業団から小児科の医者が1人欲しいと言われ、シュバイツァー博士のいたアフリカはどんな所かなと思って応募しました。ガーナでの2年間に私が見たものは、悲惨な栄養失調でベッドに横たわる子供たちでした。もう6才にもなる子どもが、やせ細ってまるで、2歳くらいの体つきで、目だけがギョロツとしていてお腹はパンパン、足は牛蒡のように細く縮んでいました。我々日本の医者には何ができるでしょう。点滴しようにも医療の棚には栄養剤も抗生物質もありません。これではギブアップするしかないのです。ところがガーナの看護婦さんたちは、米のとぎ汁を一生懸命になって子供の口に流し込んだり、嘆き悲しむ母親を熱心に励ましていました。そんな実情を目の当たりにして、私は医師として人間として、たとえ医薬品が何もなくてもできることはあるんだということを学ばせていただきました。と同時に、そんな大変な状況の中でも日常生活があり、人々の語らいや缶蹴りなどの子供の笑顔があり、人間のたくましい暮らしが楽しく

流れていくのだということを知りました。それは現場に行った者でなければ分からないことです。

そうした中で私はポリオと出会いました。知り合った男の子の家に行くと、水もなく電気もなく暗闇の中にうずくまっている物体を見て、それが人であることに気付くまでに時間がかかりました。それがポリオで両足の萎えた子供だったのです。松葉杖などもないので、いざって移動するしかありません。

2度目にポリオと出会ったのはロータリーに入ってからでした。1985年からポリオ・プラスで撲滅運動を続けていることを知りました。あのときの子供の顔が浮かびました。やはり何かをしなくちゃいかん、僕にできることがあるんじゃないかと感じました。先ほど広報の話がありまし



たが、広報で人を集めても例会に出席したら昼食を取るだけでおしまいだったというのでは、やめてしまいます。クラブ活性化のためにも、ロータリーの国際奉仕の意義を伝えなければなら

ない。去年1月にはロータリアンが先頭に立ち、インドで200万人のボランティアを動員し1億4,500万人の子供に投与したのです。私はそのとき、ロータリーに対して批判的な人をつれてインドに行きました。するとその人は帰国してから私に言いました。「関場さん、ロータリーのすごさが、素晴らしさが初めて分かったよ。俺はこれから毎年財団に寄付することにするよ」と。こういう人をどんどん作っていきませんか、単なるPRだけではロータリーの発展にはつながらないのではないだろうかと思うのです。

▼高橋

ポリオは日本にはもうないのに、インドまで行って撲滅しなかったっていいじゃないかという意見も聞きますが、そうではなくて、ゼロにしないと巡り巡って私たちの孫がポリオに罹ってしまうかもしれないのです。

この問題を詳しく知りたい方は「ロータリーの友」の英語版に、関場さんがニューヨークで講演した地区大会の記録が載っておりますので、じっくり勉強していただきたいと思っております。

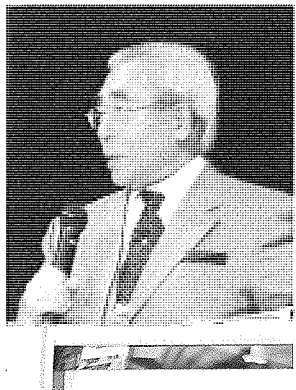
モデルクラブの試みとは

▼高橋

板橋さんの足利東ロータリークラブはモデルクラブになっていらっしゃるようですが、どういこうことをしているのでしょうか。

▼板橋

3年間の試験的プロジェクトとして世界の20カ国から10クラブずつを対象にニューモデルの挑戦をしようということでしたが、日本からは3クラブしか応募がありませんでした。私のクラブは75名をピークにしてその後56～57名に減ってしまい危機感を感じていましたし、平均年齢も60歳を超えていました。これでは21世紀に持たないのではないかと考え、プランに参加いたしました。また、商工会議所の青年部の人たちをロータリーに入れたところ、例会に出ているだけでは喜びが感じられないと言うのです。優秀な実業人でボランティアの気持ちも旺盛な彼らが言うのですから、これは我々がロータリーの身づくろいを変えていかなければ、有能な人を誘い込むことはできない。そこで例会を月4回開くことは変えないけれども、最低限の出席率を60%から50%にして新人の入会をしやすいにしました。そして新人を活発な委員会に入れました。月に1回は夜の例会にして委員会ごとのバズセッションです。皆が発言し参加して感動を覚える。今の若い人たちは、その中で自己開発ができるかどうか、実行した感動が自分に戻ってくるかどうかによって、会に留まるかどうかを決断いたします。私たちが入ったころは、少くも自分の考えと違っていても我慢しました。そうしている内に、フェロシップによって沢山のことを教わり成長することができたと思うのです。しかしその時代の感覚のズレを知らなければいけません。そういう形を取れば会員増強は必ずできます。私のクラブで



は昨年7月から既に10人の若い人たちにもらいました。不景気だからと言って諦めるのではなく、そういうことを各クラブでおやりになり増強していくことが、我々の一番の役割だと思うのです。

▼高橋

とかく日本人は、楽しいことは悪いことだという誤った感覚を持っていますが、楽しいことこそいいことなのです。楽しくなければダメなのです。仕事も辛かったらとても持たない。月火水木金土が楽しくて、日曜もまた楽しい。ですから人生が丸々楽しいのです。ロータリーも我慢してやるものじゃなくて、やりたいようにやって人に迷惑かけない、なおかつ楽しくやるのが条件で、厳しくやって楽しくなければやめる人が多いのは当然です。

財団への寄付と帰りの切符

▼高橋

私の年度には月信に財団の寄付は載せませんでした。寄付は強制するものではないからです。それで目標を達成できたら、これが本当の浄財であると申しましたら、お陰さまで目標以上が達成できたわけです。しかし実は、財団に対しては誤った理解からの批判があります。その辺をお二人からお伺いできればと思います。

▼板橋

私は財団への寄付は、今のままでは片道切符でしかないと思うのです。帰りの切符をきちっと理解していれば、割り当てとかいう感覚はなくなります。日本のロータリーでは、財団の行事内容の重要性をきちっと説明していませんね。かなり疑問符がつきます。あの人が寄付したからお宅もお願いしますというのはお祭りの寄付です。そうではなくて、これをすれ

ばどうなるという帰りの切符をもっと説明いたしましょう。ポリオは今最終段階にきています。ここでやめたら今までの努力が水泡に帰ってしまうという瀬戸際なのです。規定審議会でもポリオを第一義に置くことは決まっていますから、ぜひご理解をいただきたいと思っています。

その次に来るのはロータリー平和センターです。世界では紛争が起り続けています。これを解決するための戦士をロータリー平和センターで養成していこうということで、日本では日本基督教大学が選ばれました。2年間の修学費用が5万ドルかかります。日本では第1年度22地区がパイオニア地区として登録されています。私は国際親善奨学生に会いましたが、彼は紛争の地へ行って経験を積んでから、必ず平和センターに応募したいと目を輝かせておりました。その目を見て、日本人にもまだこんな青年が残っていたかと感銘し、我々はそんな人たちを支援しなければならないという使命感に強く打たれました。そういうふうな帰りの切符をよく説明することが、ロータリー財団の大きな役割であろうと考えております。

▼関場

私はさっき申しましたように、かつて素行のよくないロータリアンでした。財団セミナーに参加したとき、担当の先輩が説明してくれるのですがちっとも分からなかった。もう少しうまく説明してくれたらよかったのに、あれでは誰も寄付したくなくなります。もっと感動のある話が必要なのです。大体一つのスピーチは20分か25分で終わらなくては眠くなってしまいます。ところが日本では1時間以上やるものだから、ワンウェイ・チケットになってしまうのです。やはりリターン・チケットを我々はもらう必要があるし、自ら帰りの切符を入手する努力をすべきです。インドへ行かれてロータリーに対して批判的だった人がガラリと変わったように、我々もいろいろなチャンスに出向いてそのチケットを手に入れる努力をすべきだと思います。それから財団にお願いしたいのは、次から次へといういろいろなプログラムが登場いたしますので、分かり

くい点があると思います。そこでセレクトして今年はこの重点的に推進するのだというふうにやっていただきたい。そうすればもっと分かりやすい財団ができるのではないのでしょうか。

▼板橋

私も同感です。どんどんプログラムを増やすということになると、ますます複雑化して帰りの切符が買えなくなります。もっと集中的に考えるように、理事会を通じて私も言っていきたくて思っております。

夢を形に、それがロータリー

▼高橋

財団は意外と難しいのです。分からないことは聞けばいいのです。本で調べるより知っている人に聞けば電話一本ですぐ済みますから、私はいつもそうしております。人に聞くよりいい知恵はありません。偉い人ほど親切に教えてくれるものです。結論の出る人に聞くというのが要領であろうと思っています。

時間がありませんので一つだけ伺いますが、ガバナー補佐制度は曲解されている面があるようです。RI理事として、ガバナー補佐とはこういうものだよという話をお聞かせいただきたいと思っています。

▼板橋

ガバナー補佐制度の大事な点は、各地区における国際ロータリーの役員はガバナー1人であるということです。ガバナーはこれまで、各クラブの管理まで全部やっていたけれども、その指導力を十分に発揮してもらうために、クラブの管理は補佐に任せて、その報告をきちっと受けて、これはガバナーが出て行かなければならないという場合だけ出て行く。ですから、ガバナー補佐ができてガバナーが楽になる、などということはゆめゆめないわけです。ガバナーの指導力が無限に地区内に浸透していかなければならない、端的に言うとそのことです。

▼高橋

最後にお二人から、はなむけの言葉をお願いいたします。

▼板橋

ロータリーを基本的に進めていくのは、人間の夢と、夢の実現ということ。私は「夢を形に」という言葉を座右銘にしています。最後に、夢に関する私のフレーズを申し上げてみたいと思います。

夢のある人には希望がある。希望のある人には目標がある。目標のある人には計画がある。計画のある人には行動がある。行動のある人には結果がある。結果のある人には反省がある。反省のある人には進歩がある。進歩のある人には夢がある。こうしてまた夢に戻ってくるわけです。21世紀のロータリーのために、夢の実現に向けて、皆さんのご努力を期待したいと思っております。

▼関場

ロータリーの魅力は出会いです。亡くなった父が私をロータリアンにしたというお話を、先ほどいただきましたが、実は縁があってその父がビルマで生死を共にした戦友が、この地区にいらっしゃいます。今泉PGその人です。私は京都で今泉さんに出会いびっくりしつつ、亡き父がこの出会いを作ってくれたんだと、しみじみと痛感した次第です。ロータリーは素晴らしい宝箱であります。私たち一人ひとりにとって、その宝物を生かし切って豊かな人生を歩んでいくということが、ロータリーの永遠のテーマであると考えています。

▼高橋

今日は素晴らしいロータリアンのお二人から、直にお話を伺うことができ本当に幸せです。私も「面白くて為になるロータリー」こそ人生のオアシスであると思っております。ロータリーを通じて皆さんが人生を楽しんでいただければ、これに過ぎる喜びはありません。

本日はどうもありがとうございました。

